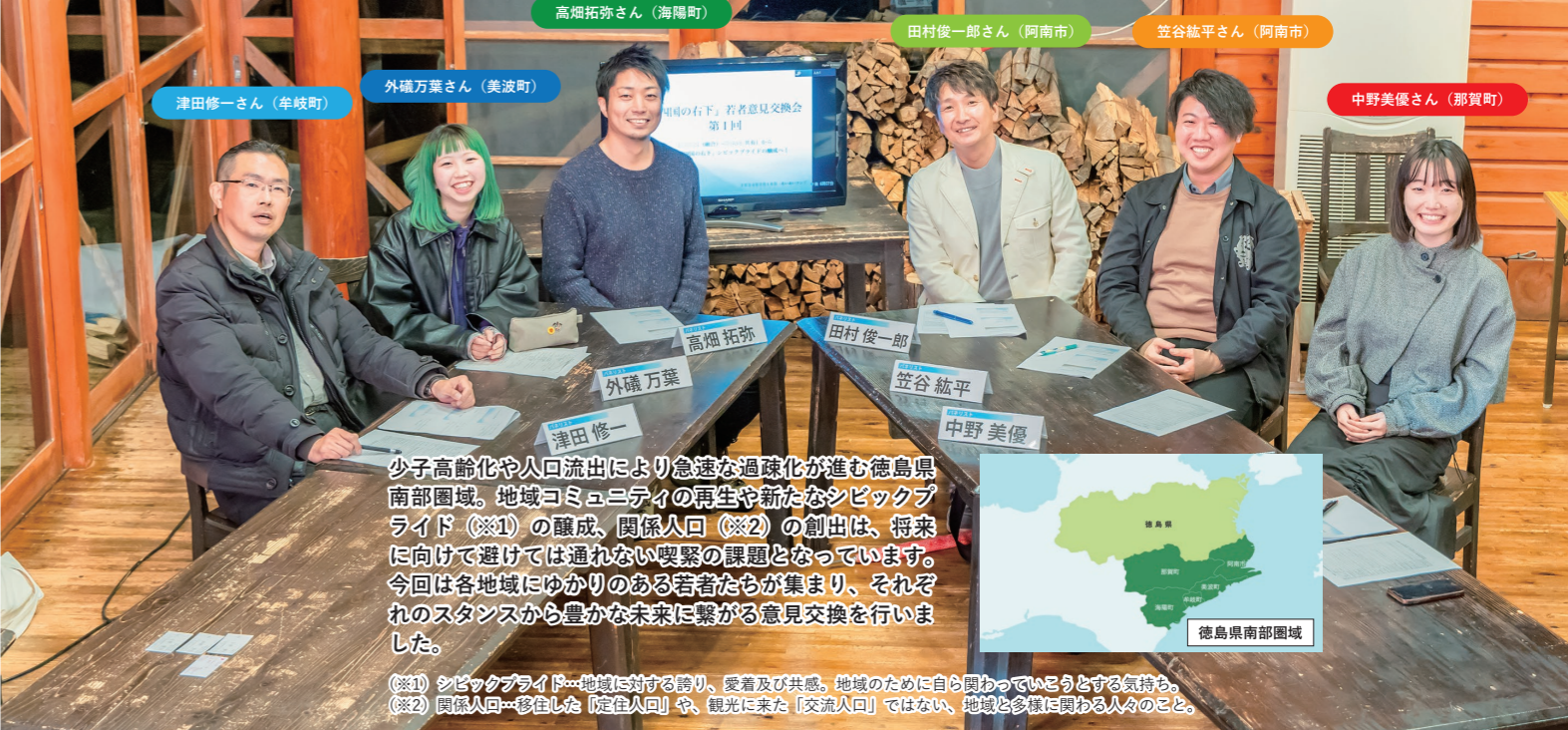


徳島県南部圏域若者意見交換会 Vol.1

2024.2.10
@相生森林文化公園あいあいらんど
(徳島県那賀郡那賀町横石大板 53-19)



少子高齢化や人口流出により急速な過疎化が進む徳島県南部圏域。地域コミュニティの再生や新たなシビックプライド(※1)の醸成、関係人口(※2)の創出は、将来に向けて避けては通れない喫緊の課題となっています。今回は各地域にゆかりのある若者たちが集まり、それぞれのスタンスから豊かな未来に繋がる意見交換を行いました。

(※1) シビックプライド…地域に対する誇り、愛着及び共感。地域のために自ら関わっていきこうとする気持。
(※2) 関係人口…移住した「定住人口」や、観光に来た「交流人口」ではない、地域と多量に関わる人々のこと。

それぞれが感じる 住んでいる地域の魅力と誇り

—はじめにみなさんが住んでいる地域の好きなところを教えてください。

高畑さん 海陽町にあった旧海部町は、かつて慶応大学教授の書籍で「日本一自殺率の低い町」と紹介されているんです。余計なことには踏み込まず、困っているときには助けるのが当たり前という、昔からの文化が居心地の良い町に繋がっているんですね。僕自身も県外から移住してきましたが、他者を受け入れるそんな文化に助けられました。人の良さといったら漠然としていますが、そういった町民性こそ、海陽町が誇るべきところだと思います。

笠谷さん お遍路文化が根付いていて、困っている人には手を差し伸べるのが当たり前で、お接待やおもてなしの精神が昔から受け継がれているのは、そういった人の良さに繋がっているのかもしれないですね。

外磯さん 私は美波町日和佐の秋祭り(※1)が大好きで、大学でも「祭りがなぜ愛着を生むか」というテーマでグループ研究をしたんです。結論としては、一つは繋がりが切れないこと。私自身2歳ごろからちようさ(山車)に乗せられ太鼓の音を聞きながら寝て、子ども神輿、中学生で太鼓、高校生で男子はちようさを担ぐというように、ずっと途切れずに関わっていられる。もう一つは、日和佐に小さな8つのコミュニティがあって、それぞれのちようさが競うことで祭りが活性化してきました。ただ

担ぎ手や見物客も減少していて、これからは若者や女性の関わり方も考えないといけない。卒業論文で地区別人口の推移を調査したんですが、祭りに関わっている日和佐の8つの地域はこの30年で人口が半減していて、でもそれ以外の地区は減少が緩やかか、変化がないので、まずはその人たちに子ども頃から祭りの関わりを持ってもらう必要性があると思っています。

津田さん 私はコロナ禍で残りの人生をどう過ごすかを考えたときに、地元・牟岐町に帰ってきました。東京に住んでいた時は近所の人と会話する機会もほぼなかったんですが、地元には親戚や関わりがあった方が多くいる。最後は愛着のある場所で、縁のある人たちと愉快地生きていきたいなと思いました。

笠谷さん 牟岐町は釣りのスポットとしても人気で、移住者の中でも有名ですね。**津田さん** そういった地域おこしの材料は多いんですが、それを実践できる人が少ないんですね。昔は漁業で栄えて、日本の遠洋漁業を引っ張ってきた地域。当時の年収が平均の3倍ほどあったそうで、映画館も牟岐町には3つもあったそうです。その漁業も最近では衰退しています。

中野さん 私は那賀町の木頭に父親の里があって、そこで昔から行われている「木頭杉一本乗り大会(※2)」がとても好きで、中学生の頃から名人を目指して毎年参加しています。こういうイベントがあると、県外の友達にも那賀町に遊びに来てって言い

パネリスト

那賀町
中野美優さん 24歳
大学進学で上京し、東京で就活中にコロナ禍になりUターン。美波町に本社を置く『株式会社あわえ』で、地域の賑わい創出に取り組んでいる。

阿南市
笠谷紘平さん 31歳
高校を卒業し大学進学で県外へ。営業職で全国勤務を経て30歳手前でUターンし、現在は阿南市の移住促進コーディネーターとして活躍。

阿南市
田村俊一郎さん 45歳
3年前、子どもが独立したタイミングで愛知県からUターン。夫人の実家の農業を手伝う傍ら自身も独立して就農し水稲・ブロッコリーを栽培。前職は船乗り。

海陽町
高畑拓弥さん 34歳
神奈川出身で総合商社から地方創生事業へ転身。7年前に移住し、水産ベンチャー(株)リプルを設立。(一社)ミライの学校、(一社)Disport代表理事。

美波町
外磯万葉さん 22歳
香川大学4年生で卒業を控え実家に。大阪府で就職が決まっているが、30代でのUターンを見据え日和佐で活躍できる人材になれるよう日々勉強中。

牟岐町
津田修一さん 46歳
高校卒業後、県外の大学に進学。東京にある企業でシステムエンジニア、国会議員秘書を経て、1年前にUターンし、現在は牟岐町議会議員。

やすくて、昨年は実際に東京と山形から遊びに来てくれました。でも一本乗りを教えてください。卒業論文で地区別人口の推移を調査したんですが、祭りに関わっている日和佐の8つの地域はこの30年で人口が半減していて、でもそれ以外の地区は減少が緩やかか、変化がないので、まずはその人たちに子ども頃から祭りの関わりを持ってもらう必要性があると思っています。

笠谷さん ちなみに名人は何mくらい乗れるんですか?
中野さん 名人は上流の激しい流れや、まったく流れの無いエリアも含めて、トータルで100mとかは余裕で乗っていますね。
津田さん 参加者は何名くらいなんですか?
中野さん 中学生以上で毎年100名がエントリーできるんですが、もう1〜2週間くらいで全て埋まっていますね。

—阿南市の魅力についてはどうでしょうか?
笠谷さん 僕の周りには色々と言いますが、内心は地元のことを好きだと思っている人が多いですね。住んでいる人たちが好きだと思える環境でない、外から来た人たちは好きと思えない。僕自身も愛知県の名古屋で住んでいましたが、都会でも生活圏はある程度限られてくるじゃないですか。そう考えると、阿南市でもスーパーやコンビニ、病院など

生活が完結できる環境がちゃんとあるし、住み心地は良いなと思うんです。さらに県南はどこもそうですが、四季を肌で感じられるというのは贅沢で、海や山、徳島市内などいろんな場所に気軽に行ける立地環境や人口の集中度の部分でも、ちょうど良い田舎感が僕は好きですね。
田村さん 以前に阿南市で10年間、そのあと名古屋で15年住んで、また3年前に帰ってきました。前に阿南市にいた時は、街のいたるところで子どもの声が聞こえたんですね。でも今回帰ってきて子どもが少なくなったなあと感じました。先ほどお祭りの話が出ましたが、昔は地元でも山車が4台出たんですが、それも今では減っています。少年野球も各小学校に1チームずつあったんですが、学校の統廃合によって減っているので寂しいですね。



(※1) 日和佐八幡神社 秋祭り。毎年10月に8台の「ちようさ(山車)」が美波町・日和佐地区内を廻り、クライマックスは大浜海岸へ練り歩く県内最大級の勇壮なお祭り。
(※2) かつて那賀川を使って、那賀町の特産「木頭杉」を運搬した一本乗りの技を後世に残すイベント。丸太に乗りバランスをとりながら川を下る競技を毎年夏に開催。

Uターン移住者の受け入れ環境

みなさんの地域における移住者の受け入れ環境について教えてください。

笠谷さん 僕は阿南市の移住促進コーディネーターをしていて、仕事は基本的に地域と移住者の方を繋ぐことがメインになっています。Uターンの場合は元々のコミュニティがありませんが、Uターンの場合は何も無いいところからのスタート。住環境が良くても、周りの人たちがどんな人なのかも解らないし、よそ者を受け入れてくれるのかと不安になる方が多いです。そこで地域の中核として活動している人たちのところに移住希望者をアテンドして、僕がパイ役になるようにしています。最初のつなぎ役としてサポートすることが重要だと思います。



津田さん 牟岐町は空き家が多いんですが、実は住める場所が無いんです。移住者にも聞いてみると、一番苦労したのは住む家を探すこと。空き家を貸してもらえないし、売ってもらえないし、空き家バンクも充実していない。役場職員が空き家の担当をしているものの、十分なサポートをするにはマンパワーが足りない状態で、民間でも行政でも空き家専属のコーディネーターが必要だと思います。実際に町おこしに成功している高知県梼原町というところがあって、そこでは空き家を町へ10年間貸与すると固定資産税免除で、600万円を

けてリノベーションした建物をまた返却してくれるんです。町は借りている期間に家賃一律2万5000円で移住者に貸し出す。改修費の半分は国、4分の1を高知県が負担して、10年間の家賃収入を加えると町の持ち出しはなし。そういった成功事例があるのに、実際に担うブレイヤーがいなのが牟岐町の現状ですね。

笠谷さん 阿南市では移住促進コーディネーター主導で空き家を貸したい人と借りたい人とのマッチングを図っていますが、民間では設備の消耗や故障などで利益を得られずリスクが多いので、不動産屋さんとかは積極的に参入しないことが多いですね。まず行政がレールを敷いて、その先に利益を生みだせるシステムができてから、民間に託さないと難しい。空き家でも先祖代々から続く家はすぐには手放せなくて、いつの間にか傷みが酷くなってしまおうか、田舎の空き家問題は難しいと思います。

津田さん 移住者の受け入れを考えるときに、まず雇用があるかということが先に来るんですが、(高知県梼原町のように)そこに綺麗な家があれば移住者はやってくると思うんです。例えば都会の人が田舎暮らしを検討しているとき、HPで綺麗な家に安価な家賃で住めると知ったら、仕事が無くても1年くらい行ってみようかと思うんです。

高畑さん 僕は移住してきた側ですが、誰も彼も呼んで住んでほしいとは思わず、良い家があるなら、良い仕事があるなら行ってやるといって感じ。この県南を見て

ほしくないですね。ここが好きだから住みたいと思って来る人には何でも協力したいけど、地域への愛や敬意を持っていない人を呼ぶ施策をするくらいなら、今住んでいる若者たちがまた戻ってきたい場所にする方へ投資した方が良いと思います。そこで言うところには海陽町に新規産業を創出していることをやっていますが、誰でも一緒にやりたいわけじゃなくて、来るメンバーには地域への敬意は絶対を持ってもらいたい。仕事があるから戻るんじゃない、無くて地域に仕事を創れる力をつけて、大好きな地元に戻ってくるという人がどれだけ増えるかが大事だと思います。どの地域も人口減少を食い止めたという目標はあると思いますが、愛のない人が増えて目標を達成するよりも、目標は達成できなかったけど、この県南が好きだという人の割合が増えたという世の中を僕は目指したいです。



高畑さんは地域の教育にも尽力されていますが。

高畑さん 8年前に海陽町に来て、地域教育や郷土愛育について一生懸命やっても子どもたちは寝てるんですね。なぜかというと、まず子ども目線に立ったプログラムになっていなくて、肌で感じてもらえなかった。あとUターンを前提に設計するのはなく、地域というよりは、その時に関わった大人とか、人の想いとかが郷土愛に

ので、そこで新しい友達ができる。その友達と一緒に、都会ではどうだ、徳島ではどうだ、みたいな話をしてるんですね。学校で「秋を見つめよう」という授業があって、デュアルスクール生は秋で連想する物にさつまいも、柿などを挙げるんですが、地元の子は「アオリイカ!」って(笑)。逆に都会の子が、地元の子たちは気づいていない阿南市の良いところを伝えてあげて、当たり前だったことが素晴らしいと気づくことがあったり。そういった都会と地方で全然違う環境、経験の違う子たちが一緒に学べるのは良い機会だと思います。

高畑さん スポーツ関連で言えば、6年前に海外プロサッカーチームのアカデミーを海陽町へ持ってこようとしたんです。サッカーだけでなく学習や地域貢献、人間教育も行う。地域の子どもとイギリスなどの異国との交流によって、自然とシビックプライドの醸成にも繋がっていくし、スポーツは言語の壁を越えて人と関わります。実はしませんが、人とうまく関わることが、人生を豊かにするんだと思います。またコロナ禍を経て、サテライトオフィスの学校版、学校の在籍を変えずに地方に行くことができるサテライトスクールみたいなものがあれば人口学習のDX化やポータブル性があれば人口は減っても当たり前のように徳島に子どもたちが来られると思います。あと、関係人口ってゼロから作ろうとするんですけど、もともと定住人口でその地域に人はいるんです。進学でほとんどの人は県外に出

繋がっていくと思っていて、大人になってそういうことを思い出して地元に戻って思返したいなという気持ちが生まれるのかなと思います。この地域で育った君たちを、できる限り応援するという大人の熱意を伝える。県外や海外に出ていく人材も送り出して、そこから地域の良さを改めて認識してもらって、ふるさと納税とか地元に住まなくても貢献できることは生まれてくると思うんです。

外礪さん 美波町が好きなのはもちろんなんですけど、私は江戸時代より前から続く日和佐の秋祭り、女性初の責任者になりたいんです。小学校の頃からずっと思っていて、35歳までという規定があるので、30歳までには帰ってきたい。その時に自分が自立した立場じゃないと責任者にはなれないと思ってるので、祭りの知識もありませんが社会人としてもキャリアを積んだ人間になりたいです。帰ってきたら起業して美波町を元気にできるように貢献したいと思っています。



中野さんはなぜUターンしたんですか？

中野さん 東京で電車に乗っている時に女性が泣いている赤ちゃんを抱いているの、そこに居合わせた他の客が舌打ちしているのを見て、将来ここでは子育てをしたくないと感じました。コロナ禍で大学の授業がリモートになり一時帰省したんですが、その時に通っていた大学の支局が阿南市にあって、アルバイトをすることにしたんです。高校までは学校の先生や役場、郵便局の人くらいしか働く大人たちを間近に見たことがなくて、帰省してアルバイトをした経験で、地元で働くイメージができたんです。那賀町はUターンより、Uターン・Jターンの施策の方を重要視している印象があったので、私はUターンして実家があったから良かったけど、もし一人暮らしするとしたら大変だなと思います。一軒家を用意されても、女性が単身で住むなら何が出るかわからないので(笑)いろいろな意味で怖いと思うし、実家があるから住む家はいいのでよって思ってるのかなと感じますね。単身者用のアパートとかのサポートがあればと思います。でもUターンをして、全然恩恵を受けてないわけでもないんです。那賀町には独自の奨学金制度(※1)があって、卒業や就職後に帰ってきて15年住むと返還しなればいけないお金を町が全額還付してくれるんです。実質負担金がゼロなので、それはすごくありがたい。



笠谷さん 県外から見ると単体の自治体だと知名度が低いので、徳島県南部圏域などで協力して発信していくことは重要だと思います。各地域の特性を活かして、どう共存・共栄できるかをまた話したら良いなと思います。

— 今回を踏まえて、第2回ではさらに深い意見交換を行いたいと思います。みなさん本日はありがとうございました。

地域と関わる人を増やすために

— 関係人口の創出に関する、みなさんのご意見を聴かせてください。



田村さん 妻の実家(阿南市)の農家を昔から手伝っていて、土を触るのは楽しくて嫌いじゃなかったから、いつかは帰って自分でやりたいと思っていました。ちょうど先日JA主催の若手勉強会に参加したんですが、その時にオンラインで山形県のさくらんぼ農家さんの体験ツアーの事例を聞いたんです。参加者はお金を払って4泊5日、1日約9時間の農業体験をする。作業を手伝っても報酬はなくて、さくらんぼが食べ放題のみ。実際に体験して面白かった、その農園のスタッフになった参加者もいたそうです。都会の人に農業体験の価値を感じてもらって、人材確保にも繋がる試みは面白いなと思いました。自分も将来的には実家をリノベーションで宿泊所にして、体験型の農業ツアーを企画してみたいと思っています。土を触って、モノ(農産物)作りを楽しんでもらいたい。

笠谷さん 中野さんが取り組んでいるデュアルスクールについても聞いてみたいです。

中野さん デュアルスクールというのは、例えば東京の小学生・中学生がいる家族が、短期間だけ徳島に住んで、子どもは現地の学校に通います。住民票にとられることなく、いろんな学校に通えるのがデュアルスクールですね。昨年12月に阿南市にこのデュアルスクール生が初めて来て、このご家族も間違いなく関係人口になっていると思います。子どもは阿南市の小学校に通う

の会の
のこの
の交換
の意見
の交換
の意見
の交換
の意見



(※1)「那賀町もんでこい奨学金制度」。奨学金の貸与を受けた者が学校卒業後15年以内に通算10年以上定住すると、町より奨学金返還金が還付される。
(※2)「ひとつむぎ」は牟岐町を中心に、教育やまちづくりの支援を通じた地方創生を目指して活動するNPO法人。徳島や関西在住の多様な大学生が設立・運営している。